ISSUE
95
神戸アートビレッジセンター
Kobe Art Village Center
Jan.-Mar. 2021

ART VILLAGE

KAVCは年始早々賑やかやなぁ！
関西を中心に活躍している６つの
劇団が、次から次へと魅力的な
世界観を繰り出す豪華な
演劇セレクションの第二弾から、
演劇セレクション「KAVC FLAG COMPANY 2020-2021」は、2020年11月のAhwooo『パンと日本酒』を皮切りに、
2021年3月まで上演が続きます！　詳しくは中面「みちくさ天国」にて。
新開地のまちを舞台に歌って踊って
みんなで盛り上がる刺激的なイベント
1月17日（日）に舞台芸術集団「山猫団」による「新開地カブキモノ大興行」を開催！
2018年、2019年に続き、3回目の開催です。
まで、必見の催しが盛りだくさん！
まだ油断できひん日が続くけど、
KAVCでは、引き続き新型コロナウィルス感染拡大防止の対策を行っています。
ご来館の際には、必ずマスクの着用をお願いします。手指の消毒や、こまめな換気にもご協力ください。
よつばやのロシアピロシキでも食べて、
チャイコフスキーの音楽を聞かせて発酵させた、もちもちの生地が美味しいピロシキ。
45年以上愛されている、新開地定番の味（新開地2-3 メトロこうべ新開地タウン内）。
元気に遊びに来たって。頼んます！

ART VILLAGE VOICE —— CONTENTS

KAVC CONVERSATION #05
これからの創作・体験・発信を考える　オンライン配信談義　鼎談：いいむろなおき（いいむろなおきマイムカンパニー）×大熊隆太郎（劇団壱劇屋）×前田詩穂（KAVC）
STORY KAVCスタッフと、ときどき保安のおっちゃん物語 | STAFF's VOICE KAVCからのお知らせ
KAVC REPORT：特集上映「ニッポンの喜劇映画セレクション 第三弾」
KAVC これ、見た？ REVIEW レビュアー：福元崇志 | 新開地新名物 vol.11 稲田串カツ店の「つまみたくなる立ち食いスタイル」
EVENT SCHEDULE 2021.01-03 | 神戸みちくさ天国

www.kavc.or.jp

KAVC
CONVERSATION
#05

これからの
創作・体験・発信を
考える

オンライン配信談義

前田詩穂

［神戸アートビレッジセンター 演劇・ダンス担当］

×

大熊隆太郎

［劇団壱劇屋主宰］

×

いいむろなおき

［いいむろなおきマイムカンパニー主宰］

新型コロナウィルス感染拡大防止のため、オンライン上でさまざまな文化芸術活動を配信する流れが生まれています。なかでも、これまで主に劇場というリアルの場で、演者・観客による関係性から表現を立ち上げてきた「演劇」は、この状況下でより発信のための創意工夫が求められている分野のひとつといえるでしょう。KAVCでも、コロナ禍の劇場における新しい鑑賞のかたちを考える取り組みとして、2020年6月からシリーズ公演企画「新しい劇場のためのwork」を始動。今回はその参加アーティストをむかえ、制作過程を振り返りながら、これからの創作の可能性や表現・鑑賞体験のあり方について考えていきます。

「映像で見せること」から考える新しい表現

前田：2020年は外出自粛要請や緊急事態宣言の発令で3月から5月末までの3ヶ月、臨時休館を余儀なくされ、いろいろなことを考えさせられる年でした。特に演劇・ダンス事業としては、KAVCを劇場としてどうひらいていくかが課題に。そんななか、舞台芸術プログラムディレクターのウォーリー木下とともに「こういう状況だからこそ、劇場の新しいあり方を探る実験をはじめよう！」と、6月の開館再開後に自主企画「新しい劇場のための work」を始動させました。その第一弾として開催したのが、いいむろさんによる「マイム小品集」[01]です。言葉を扱わない舞台表現を通して、コロナ禍における「劇場という場」を一緒に模索したいとお声がけしました。

いいむろ：僕にとってオンライン配信は初の試みで、実験的な意味合いの強い公演になりました。当日は、十分に客席の間隔をとるため通常の1/4ほどの席数に制限されていたので、人がまばらな会場を前に切ない気持ちにもなりましたが（笑）、お客さんはすごく熱かったですね。まだ対面での公演に世の中がピリピリしていた時期だったけれど、その緊張感を取り払うかのように、拍手で「ここで観ているよ！」と示してくださっているように感じて。劇場の舞台で、直接お客さんと向き合って表現できるありがたさを再認識しました。配信は、定点カメラから公演の様子を映すシンプルな機材環境。「まずはやってみよう」という挑戦の気持ちで臨みました。また、今後もオンラインで作品を発表する機会はあるだろうし、公演に際してどういうメリット・デメリットがあるのか、視聴者からどういう反応があるのかなどを知っておきたいという想いもありました。実際にやってみて、海外の人や僕のオンラインレッスンを受講している東日本在住の生徒さんなど、遠方の方々に公演を観ていただけたことは嬉しかったですね。場所を超えて表現を届けることができるのは、配信の魅力だなと思いました。

前田：未就学のお子さんがいて、普段なかなか劇場へ足を運べない方からも「久しぶりに公演が観られた！」と思いがけない反響がありました。そういう声を聞くと、距離や鑑賞方法など、これまで見えていなかった障壁に改めて気づくことができる。オンライン配信によって多くの方々にご覧いただける環境がつくれたことは、公共文化施設としてもアクセシビリティ面で意義を感じました。そして、手応えを感じたいむろさんの公演から4ヶ月後、10月に第二弾として開催したのが劇団壱劇屋による「異空間クラスター」[02]でした。大熊さん、創作プロセスで意識したことがあれば教えてください。

大熊：僕たちのときは6月とは状況も変わり、いろんな劇場で収容制限が緩和され、公演が次々に再開していました。KAVCホールも全席利用可能になっていたので、それならばもう一歩踏み込んで、自分たちにどんな挑戦ができるだろうと考えて作品を構成していきましたね。やっぱり、KAVCのような規模の小さな劇場の魅力は、観客と演者との間で密なコミュニケーションが行えること。なので、舞台を配信でディスプレイ越しに観ているお客さんとも、同じ空間を共有している感覚を生み出したかった。もちろん、劇場でも劇団のなかでも感染症対策は徹底しつつ、どうすれば密な感覚が出せるかを模索していました。たとえば、カメラワークの打ち合わせでは、「ここはこのアングルがいい」「ここはタイミングを遅らせよう」と配信担当の劇団員と綿密に計画を立てて。これまでも記録撮影や定点カメラの映像を配信する経験はありましたが、今回ほど表現に注力したのははじめてです。コロナ禍が当分続くことを考えると、今後はオンライン配信での鑑賞体験を意識して、常に演出・編集的な工夫をこらしていく必要があるのかなと感じています。そういう意味でこの企画は、「舞台映像」という方法でひとつの作品をつくっていく実験の機会になりましたね。

いいむろ：舞台表現をどう映像作品的につくるかは、僕もすごく興味があります。

大熊：「見せ方のバリエーション」ともいえるかもしれません。視線の誘導なんかは映像ならではのつくり方だと思いますし、普段見ることのないような工程も伝えられる。没入を促すための演出がきくんですよね。だから、舞台とは別のかたちで、あるいは舞台と映像が合わさることで、今までにない表現や見せ方が生まれるんじゃないかなと。そう考えると、舞台映像はこれまであるようでなかった、まるで隠し金山のようなものなのかもしれません（笑）。

いいむろ：今回のコロナの影響で、ある地方公演が中止になり、代わりにパフォーマンスを撮影した映像の出品を依頼されたことがありました。それは「映像作品」を求めるものではなかったので、単に舞台を正面から撮ってもよかったんだけれど、僕はなんだかもったいない気分になったんですね。そこで、僕が新幹線に乗って現地に向かうところから映像を撮りはじめて、ビニールテープを貼って席数を制限した劇場の客席も映しつつ、そこからパフォーマンスへ入っていくという構成を考えました。色彩も工夫して、まちなかを歩いて劇場へと向かう場面はカラー、舞台に立っているときはセピアで、公演が終わったあとは再び日常へと戻っていくようにカラーで表しています。映像にする上で、どんなところに焦点を当てるか、構成も含めつくり込むことで、いろんな発見がありましたね。大熊君が言うように、生の舞台の良さを維持しながら、演者・観客との間に生まれる劇空間に映像のエフェクトを掛け合わせると、まだ誰にも触れられていない表現に手を伸ばせるのかもしれないなと思いました。

いいむろ：こういう話を1年後もしているのかどうかですよね。「あんな時期もあったね」と言えているといいな。

作品と観客のつながりを生み出す

大熊：話していて思いついたのですが、KAVCがこれまでに行ったオンライン公演を、アーカイブしていくのはどうでしょうか？　というのも、あるお客さんから、「アーカイブによって、移動時間に好きな場面を繰り返し観ることができた」という声をいただいたんです。

前田：たしかに！　いいアイデアですね。繰り返し観ることで、作品への理解を深めていけますし、お客さんご自身が興味を横断的に派生させていくツールにもなると思います。いいむろさんのファンの方が、壱劇屋の舞台を観に行かれることもあるかもしれませんし、逆もしかり。フットワークを軽くして、劇場に足を運んでいただくための仕掛けは、もう少し検討を重ねていく必要がありそうです。

いいむろ：僕の公演を観に来てくださった方が、壱劇屋に流れてしまうのはちょっと嫌ですけどね。

大熊：そこはWin-Winでいきましょうよ！（笑）。

いいむろ：冗談です（笑）。前田さんがおっしゃるように、劇場が作品を発信していく仕掛けづくりはとても大事だと思います。ある意味、舞台映像としての完成度は、テクニカルな要素を加えれば、みんなそれぞれの方法で高めることができる。でもそれ以上に、オンラインと劇場を横断させながら、お客さんと作品との接点をどうつくるかというアイデアが、これから重要になってくるでしょうね。極端な話、舞台映像を配信しつつ、ラストシーンだけは劇場に行かないとわからない！とか。お客さんが想像力を広げていけるような動線を、アーティストが劇場とともに描くことができれば、配信での鑑賞体験の楽しみも、より増していくのかなと思います。

前田：KAVCがこれから「どう劇場をひらいていくか」を考えたとき、リアルの場であれオンラインであれ、劇場そのものを使うアーティストのみなさんの力が欠かせません。また、おふたりが現在の状況を悲観的にとらえず、前向きに考えてくださっていることにも心強さを感じました。「劇場をひらく」というのは、さまざまな方法で、作品との出会いや人とのつながりを生み出す場になることだと思います。だからこそ、KAVCに来てくださる方々と一緒に考え、これからもその方法を試行錯誤していきたいです。

収録：2020年11月11日（水）Zoomにて

［01］『いいむろなおき マイム小品集』

「新しい劇場のための work:01」として2020年6月27日・28日に開催した、いいむろ氏によるソロ公演。新型コロナウィルス感染拡大防止策として、KAVCホールの客席を¼の約50席に制限し、YouTubeでの映像配信を実施。言葉を扱わない表現を通して、観客とともに劇場での鑑賞体験を改めて問うた。

［02］『異空間クラスター』

「新しい劇場のための work:02」として2020年10月28日・29日に開催した、劇団壱劇屋による演劇公演。KAVCホールを異空間に見立て、劇場と映像配信による2つの観劇方法を提示した。劇場では防護服を纏った役者が客席通路を歩き、観客もペンライトで役者を照らすなど、一体感のある演出に。また、配信では複数台のカメラをスイッチングすることで、舞台映像的な表現に試みた。

［03］観劇三昧LIVE

2020年7月に株式会社ネクステージが開始した演劇ライブ配信サービス。チケット販売から撮影、配信まで利用する劇団のニーズに応じたサポートを行う。2013年から同社が運営している演劇動画配信サービス「観劇三昧」は月額視聴だが、本サービスでは劇団・カンパニーが独自にチケット価格を設定できる。

オンライン配信における「チケット代」

前田：おふたりの話を聞いて、舞台作品を映像で効果的に発信するために試行錯誤を重ねるなかで、新たな表現に挑戦されているのだと感じました。一方、観客の視点に立つと、オンライン配信が身近になったことで「いつどこで、どうやって、何を観るのか」というように、観客側のスタンスも問われているように思います。

いいむろ：それは僕も感じます。うちのカンパニーにはマイム養成クラスがあるのですが、入団条件として「カンパニーの演劇を観たことがある」という基準を設けているんです。これまでは「YouTubeで観ました」と言われたら、それは違うんじゃないかと感じたと思うのですが、今後はそうでなくなる可能性もある。生まれたときからYouTubeがある世代にとっては、「生で観ることと映像で観ることって、どう違うの？」という感覚もあるかもしれないですよね。でも、僕としては、舞台で同じ空気を吸う醍醐味って、映像では伝わらない気がするんです。それに、画面だけを観て作品を判断されてしまうのも、なんとなく寂しい……。このあたりは葛藤があります。あと、映像による舞台の鑑賞体験のあり方を考えたとき、もうひとつ悩むところがその「対価」です。オンライン配信の適正なチケット価格って、どれぐらいなんでしょう？

大熊：劇場の舞台と同じ価格設定にするのか、もっと安くていいのか。さまざまな配信プラットフォームがありますが、この間「観劇三昧LIVE」[03]を利用したときは、観劇慣れしたお客さんが視聴するサービスだったこともあり、劇場公演と同じ価格にしました。でも、今後どう考えるかは悩ましいですね。

いいむろ：電車に乗って劇場へ行き、舞台を観る。そんな過程を経て観る公演に、たとえば3,500円払うことは、僕らも慣れていると思うんです。でも、それが配信に置き換わった途端、なんだか躊躇してしまう。そこにどういう価値を見出すのかが改めて問われるからだと思うのですが、前田さんはどう思いますか？

前田：単に劇場公演のチケット代の半額に設定すればいいわけでもないですし、劇場に普段から来ていたお客さんも、極端に安価であれば「配信でいいや」と離れてしまうかもしれません。私もこのコロナ禍でライブ配信をよく観るようになったのですが、劇場なら7,000円するチケットが3,000円で販売されていて、思わず購入したことがありました。でも当然ながら、配信にも労力や費用はかかっているわけですよね。そのことに意識が向かなかった自分にはっとしました。 オンライン配信にどれだけの金額を払えるか、あるいは払ってもらえるかという基準は、これからつくられていくものなのだと思います。

大熊：チケット代を決めるための、配信による鑑賞体験の質は、お客さんのコンディションに委ねられているところもありますよね。たとえば、自宅のパソコンで観ることもあるかもしれませんし、出先でスマートフォンから観ることもあるかもしれない。劇場で公演をする場合は、僕たちが環境を準備できるじゃないですか。会場選びから空間づくり、パンフレットの配布まで含めて体験を提供するので、こちらもそれにかかる費用を考慮して価格を設定できる。でも、配信だとすべてはカバーできない。だから、劇場の通常公演と同じ価格を提示することに抵抗感を覚えるのかなと。とはいえ、観劇の入り口として、オンライン配信を視聴することのハードルを下げたい気持ちはあるので、たとえば無料のコンテンツもあり、記録映像で1,000円、もっと劇団の工夫が込められたものなら2,000円というように、価格帯に幅があってもいいように思います。

前田：観客の立場からすると、配信チケットを買うことは、アーティストの活動に自分がどう関わるかという意思表示でもあると思うんです。いつか劇場で生の公演が観られることを期待しながら、演者と観客の関係性を維持し、あるいは新たに築いていく。配信をきっかけにして、おふたりの作品を劇場で観たいという方がどれくらい増えるのかという点も、今後楽しみなところです。

大熊：そういうかたちで、配信を通して活動を知ってもらったり、劇場に観に来てもらったりできたら嬉しいです。つくり手としては、作品の価値を守りながら、時代や状況に合った価格設定をしていきたいですね。1年後、状況がどうなっているのかという不安もありますが……。

いいむろなおき｜パリ市マルセル・マルソー国際マイム学院、ニデルメイエ国立音楽院コンテンポラリーダンス科最上級コース首席卒業。いいむろなおきマイムカンパニー主宰。関西を拠点に国内外で公演やワークショップ、マイム指導・演出・振付など幅広く活動中。2019年、KOBE ART AWARD大賞受賞。

大熊隆太郎｜2005年、母校である大阪府立磯島高校演劇部の全国大会出場メンバーで劇団壱劇屋を結成。2008年より活動開始。パントマイム・ダンス・会話劇・コント・アクションなど多様なジャンルを複雑に融合させ、観る者を異世界へと誘う「世にも奇妙なエンターテインメント」を創作する。

前田詩穂｜2017年からアシスタントとして在籍、2020年より演劇・ダンス担当に。高校生とひと夏をかけて演劇作品をつくり上げる「Go! Go! High School Project（通称ゴーハイ）」や、演劇セレクション「KAVC FLAG COMPANY」などを企画・運営。10年前にゴーハイに参加したOGでもある。

公演・メディア出演情報

いいむろなおきマイムカンパニー

ピッコロシアター主催事業
「オリンピアの夢」
作・演出　いいむろなおき
日時：2021年4月16日（金）・17日（土）
会場：ピッコロシアター大ホール

劇団壱劇屋

大船渡市民文化会館自主事業
壱劇屋イマーシヴシアター
「リアスホールダンジョン」
作・演出：大熊隆太郎
日時：2021年3月20日（土）・21日（日）
会場：大船渡市民文化会館リアスホール・大ホール

Kiss FM KOBE｜ラヴィーナ＆メゾン提供
「STORY FOR TWO」
毎週土曜21:55放送

いいむろなおき・大熊隆太郎出演

ノンバーバルシアター
「ギア -Gear-」
2012年より京都にてロングラン公演中
会場：京都ギア専用劇場（ART COMPLEX 1928）

KAVCでは、コロナ禍における事業のオンライン配信に挑戦中。今回は、その取り組みのひとつを紹介します。

NEW TIPS
for KAVC New normal

TIPS
演劇にまつわるあれこれを
語り合う配信番組
「KAVC PLAY RADIO こやばなし」
https://www.youtube.com/playlist?list=PLDVOHUSw0AyCrcRWt0ajCp9uleSIKurT3

毎週火曜日に更新中！

観劇とは違った視点で、より多くの方に舞台の面白さを伝えるべく2020年10月からスタート。番組パーソナリティは、KAVC舞台芸術プログラムディレクターのウォーリー木下と、関西を拠点に舞台芸術の制作を行う若旦那家康氏。演劇関係者や有識者をゲストに招いてトークを収録し、編集後に公式YouTubeチャンネルにて公開している。

プロにお任せすることもできる配信を、スタッフがDIYで行う意味とはなんだろう？と日々模索しています。トークイベントを中心にオンライン開催を重ねてきて良かったのは、多くの方に企画の中身を“手軽に、気軽に”知っていただけること。KAVCを新たな目線で見聞できる「副音声」のような位置づけで、配信を活用していくのが面白いかも？と思っているところです。

野澤美希（広報担当）

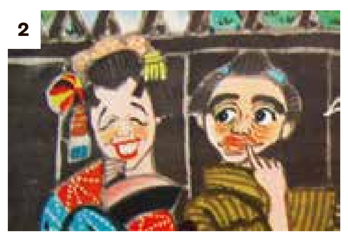
ART VILLAGE BIG VOICE

ISSUE
95
Jan.-Mar. 2021

ART VILLAGE VOICE vol.95
発行日：2020年12月28日
発行元：神戸アートビレッジセンター
指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団
〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14
TEL 078-512-5500　FAX 078-512-5356
開館時間 10:00-22:00
休館日 毎週火曜日（火曜が祝日の場合は翌日）・年末年始
編集ディレクション＆編集：多田智美・永江大（MUESUM）
編集：妹尾実津季・鈴木瑠理子（MUESUM）
アートディレクション＆デザイン：仲村健太郎・小林加代子

KAVC REPORT　KOBE CINEMA PORT フェス2020関連企画

特集上映「ニッポンの喜劇映画セレクション 第三弾」



1：
『喜劇 女は度胸』
©1969 松竹株式会社

2：
『エノケン・笠置のお染久松』

3：
『世にも面白い男の一生 桂春団治』
製作会社：宝塚映画

4：
『喜劇 にっぽんのお婆あちゃん』
©1962 松竹株式会社

KAVCの映像事業「KAVCシネマ」では、毎月の新作上映のほか、年数回の特集上映を開催しています。映画史上に名を残す人物や特定のテーマから、独自の切り口で作品をラインナップ。また、過去の貴重な映画作品をフィルム上映する機会でもあり、毎回多くの方々の反響を得てきました。なかでも、2018年から続く「ニッポンの喜劇映画セレクション」は、新春の笑い初めとして親しまれる人気企画です。今年は「KOBE CINEMA PORTフェス*」の関連企画として実施し、映画作品の魅力をその背景とともに掘り下げる講座も開催しました。今回は、KAVC映像担当の岡本とともに、日本映画のなかで描かれる“笑い”の系譜を紐解く本企画を振り返ります。

*KOBE CINEMA PORTフェス…2018年から実施している地域映画イベント。日本ではじめて映画が上陸し、華やかな興行の時代を経てきた神戸のまちをさらに発展させるべく、神戸アートビレッジセンター、パルシネマしんこうえん、Cinema KOBE、元町映画館が合同開催。各館での映画上映はもちろん、近隣店舗と連携し、期間中は神戸のまちを巡りながら映像文化や映画作品に触れることができる。

特集上映「ニッポンの喜劇映画セレクション」は、今回で第三弾。作品ラインナップの監修に娯楽映画研究家の佐藤利明氏をむかえ、興行街として栄えた神戸のまちとは切っても切り離せない、“笑い”の系譜をつむいできた人物に着目した。

上映作品は、戦前からの喜劇王・榎本健一（通称エノケン）が、戦後を象徴する「ブギの女王」笠置シヅ子とタッグを組んだ『エノケン・笠置のお染久松』、戦前の吉本興業を代表する噺家・桂春団治の破天荒な生涯を森繁久彌が演じた『世にも面白い男の一生 桂春団治』。そして、名匠・今井正がミヤコ蝶々や北林谷栄、飯田蝶子ら演じる「おばあちゃん」のユーモラスな日々を描いた『喜劇 にっぽんのお婆あちゃん』、「男はつらいよ」シリーズを手がけた山田洋次が原案を務め、今年7月に逝去した森崎東が監督デビューを飾った『喜劇 女は度胸』の4本。KAVC映像担当の岡本は、「“笑い”と聞くと、漫才や落語を思い浮かべるかもしれません。ですが、長い歴史のなかで生まれたジャンルは実にさまざま。この企画では、その多様なジャンルを築いてきた人々の作品を、時代背景とともに、図鑑のように楽しんでいただきたいと考えました」と振り返る。

たとえば『エノケン・笠置のお染久松』は、日本の喜劇の草創記に関東で流行した、ミュージカルと笑いを組み合わせた手法を見てとることができる貴重作。『世にも面白い男の一生 桂春団治』は、のちの松竹新喜劇の人気役者・藤山寛美の十八番作のルーツでもあり、同劇団を創設した渋谷天外が脚色を担った作品だ。また、「寅さん」でお馴染み、渥美清の粗野でエネルギッシュな演技が光る『喜劇 女は度胸』にも触れておきたい。物語のあらすじは次のとおりだ。

舞台は高度経済成長期の60年代。発展を象徴する大手メーカーのネオン看板と、質素なまちなみが同居する風景には、急速に変化する時代の色が表れる。

主人公の桃山学は羽田工業団地の長屋に育ち、女好きで怠け者の父・泰三と兄・勉吉、家族に呆れ無関心な母・つねとの4人暮らし。穏やかな家庭に憧れるも、顔を見れば取っ組み合いの喧嘩をする父と兄にうんざりし、彼らを制して「家庭とは、人間の未来の生活について語り合う場なんだ！」と叫ぶ。そんな彼が夢見たのは、恋人の白川愛子と歩む将来だった。しかし、学が彼女にゲーテの恋愛詩集を贈ると、ある日勉吉が「コールガール（売春婦）が持っていた」と、そっくり同じものを持ち帰ってくる。そこから、物語はどたばたとこじれていく――。勘違いが引き起こす出来事に翻弄され、ぶつかり合う登場人物の姿は、時に滑稽に、人間味あふれる姿で観る者を惹きつける。

映画史を時間軸で辿りながら、文化の成り立ちを深くまなざす本企画。岡本が語る、映画を“図鑑のように楽しむ”工夫は作品上映にとどまらない。10月3日（土）には、先立って前出の佐藤氏を講師にむかえた映像＆映画講座「ニッポン喜劇映画時代」も開催。岡本は「ただ『面白い』で終わるのではなく、作品鑑賞と合わせて、より映画作品への理解を深められる機会を設けています」と話す。

講座では、喜劇が興った戦前から「寅さん」が生まれる1960年代までを総括し、映画史を築いた役者の活動を作品とともに紹介。たとえばエノケンによるミュージカル・コメディは、1920～1930年代にハリウッド映画で活躍した人気俳優エディ・カンターが歌う劇中歌を、彼が独自の面白おかしい日本語で替え歌にしたことにはじまるという。佐藤氏は、カンター主演の映画『ウーピー』や『エノケンの青春酔虎伝』などの劇中場面を交互に参照し、元の歌詞と作品の世界観を比較しながら、エノケンのユーモアを際立たせた。講座の冒頭で、佐藤氏はこのように語っている。「映画はタイムマシンだと思います。その時代の風景や風俗を、僕らは現代にいながらにして体感できる」

先述の『喜劇 女は度胸』では、登場人物たちが個々に抱える行き場のない想いが描かれる。学は愛子がコールガールをしていると疑って苦しみ、疑われた愛子は心に傷を負う。コールガールをしている愛子の友人・笑子は、生き方を侮辱されたことに腹を立て、泰三と勉吉は、互いの不器用な思いやりが交わらず衝突する。しかし、つねは悶々とする彼らを茶の間に集め、互いの言い分を吐き出させることで、家族や恋人という関係性からそれぞれをひとりの人間として解き放つ。奇しくもそこに立ち上がるのは、学が求めた「人間の未来の生活について語り合う場」としての“家庭”の姿だ。

岡本は「人は誰かと一緒に笑うことで、楽しく前向きになれるのだと思います。だからこそ、一緒に劇場で、作品を観ていただきたい」と語る。劇場に偶然居合わせた観客と、笑い声を通して空間を共有できるひとときは、喜劇ならではの体験ともいえるだろう。

そして、岡本はこう続ける。「これからも、喜劇だけでなくさまざまな映画作品を、多様な切り口で深く紐解く機会をつくっていきたいです。観客側の知識欲を刺激し、新たな興味や関心へとつながるヒントを提供できるような作品上映、関連企画を開催し、文化施設として映像や映画に親しむ場をつくりたいと思います。今後のラインナップにもぜひご期待ください」

取材日：2020年10月19日（月）KAVCにて

2018年の第一弾は、藤山寛美など関西の芸人・喜劇役者を中心に、日本の笑いのルーツといえる作品を編成。2019年の第二弾では、古今東西のコメディを比較し、新開地で幼少期を過ごした喜劇役者の大村崑、東京を拠点に人気を誇ったコミックバンド、クレージーキャッツなどの出演作を公開した。

KOBE CINEMA PORT フェス2020関連企画
特集上映
「ニッポンの喜劇映画セレクション 第三弾」

日時：2020年10月17日（土）～21日（水）
会場：KAVCシアター
上映作品：『エノケン・笠置のお染久松』（監督：渡辺邦男、1949年）、**『世にも面白い男の一生 桂春団治』**（監督：木村恵吾、1956年）、**『喜劇 にっぽんのお婆あちゃん』**（監督：今井正、1962年）、**『喜劇 女は度胸』**（監督：森崎東、1969年）
主催：神戸アートビレッジセンター

映像＆映画講座「ニッポン喜劇映画時代」
日時：2020年10月3日（土）①13:00～17:00②17:00～19:00
会場：KAVCギャラリー｜講師：佐藤利明（娯楽映画研究家）

神戸みちくさ天国

神戸アートビレッジセンターで日々開催される、さまざまな催しごと。合わせて「せっかくならここも行っとき～！」と背中を押したい、魅力的な道草スポットをご紹介。

title: 三重野龍 / illustration: まちこ！

KAVCで、挑戦的な舞台をまとめて楽しむ「KAVC FLAG COMPANY 2020–2021」を見る

photo：小嶋謙介

2021年3月に上演される、うんなま『ANCHOR』まで全6劇団がKAVCホールに登場

今観るべき関西の劇団公演シリーズ「KAVC FLAG COMPANY」。2020年11月に上演されたAhwooo『パンと日本酒』に続いて、年明け1月から3月にかけても公演が続きます。「劇場をより面白く使ってくれそうな集団」をセレクションの基準とした今回は、6つの劇団がKAVCホールに登場。前年にも増して、それぞれの劇団の持ち味が存分に発揮された作品がラインナップされています。演劇鑑賞の前後に、神戸で昔から親しまれてきたスペースを利活用し、より面白く使われているスポットに立ち寄ってみては。

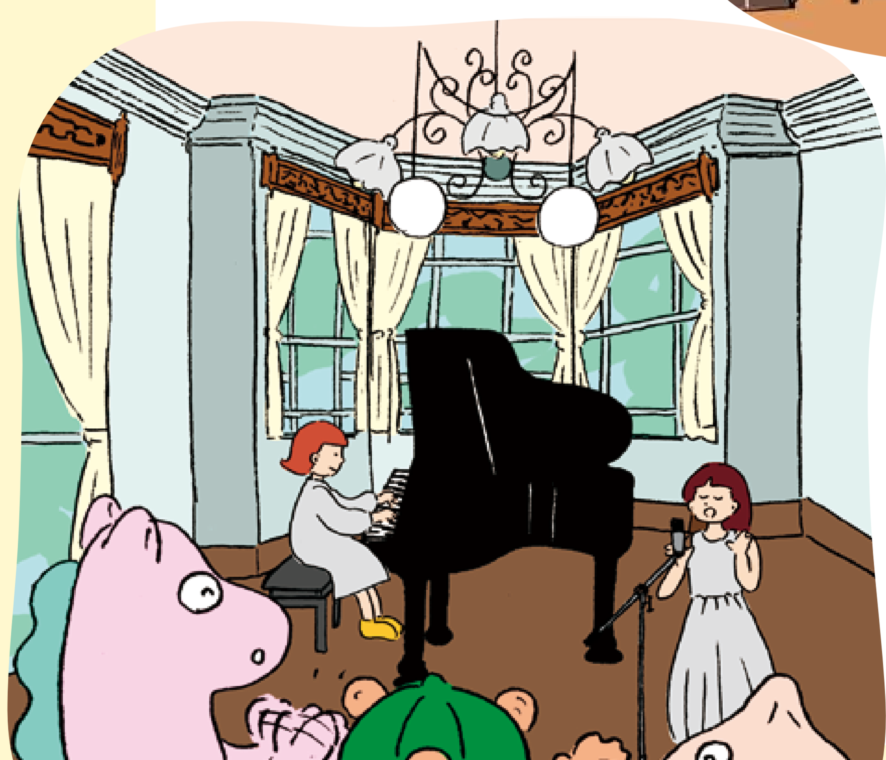
期間：2020年11月～2021年3月
会場：KAVCホール
参加団体：Ahwooo、努力クラブ、安住の地、オパンポン創造社、劇団不労社、うんなま
※各団体の公演日時については、Webサイトをご確認ください →

その前に　地元に愛されるファッションビルで湊川市場の食に舌鼓を打つ

「神戸の台所」と評される湊川市場。その入り口にあるファッションビル・パークタウンに、「オール湊川」をテーマにした食堂がオープンした。市場で仕入れた野菜から魚、カステラまで使ったメニュー約200種類が楽しめる。腹ごしらえに、湊川市場の味を堪能して。

湊川大食堂
神戸市兵庫区荒田町1-20-1
湊川パークタウン1F

その後に　旧グッゲンハイム邸でさらなる刺激に触れる



20世紀初頭に建てられた、海を望むコロニアルスタイルの洋館。平日はヨガやピアノなどレッスン、ロケ撮影、休日は映画上映やライブ、結婚式、研究会、おもちつき、流しそうめんなどに活用され、地域の公民館的存在となっている。コロナ禍では、You Tubeで配信実験も◎

旧グッゲンハイム邸
神戸市垂水区塩屋町3-5-17
※最新の情報はWebサイト（www.nedogu.com/blog/）をご確認ください

新開地新名物 KAVC認定

vol.11
稲田串カツ店の「つまみたくなる立ち食いスタイル」

title & frame: 廣田碧 / illustration: 黒木雅巳

串の種類　9種類
のれんの渋さ　★★★★★

東山商店街でひときわ存在感を放つ名店。カウンターに並ぶ、揚げたてのいもやうずらの卵、牛肉などの串（全品100円）を自由に取って立ち食いするスタイルは、まるでつまみ食いのようで、楽しさを掻き立てる。

稲田串カツ店　神戸市兵庫区東山町1-12-16

作家を神戸におむかえする際、東山商店街へご案内しています。目を引くのれんに吸い込まれていく人々……気になる存在です。

推薦者
岡村有利子［美術担当］
中川恵理子［アシスタント］

KAVC EVENT SCHEDULE

2021.01-03

最新のイベント情報は随時Webサイトなどでお知らせします。
※施設工事のため、2021年1月-2月の間KAVCシネマの通常上映は休映します

1 JANUARY

9日（土）　会場：1roomほか
新開地土曜マルシェ

16日（土）　会場：KAVCホール
第三回 新開地カブキモノ大興行
1日体験！山猫団と踊ろう！

17日（日）　会場：KAVCホール
第三回 新開地カブキモノ大興行
山猫団ダンス公演 夢と踊れ！
出演：長井江里奈、北園優、鈴木綾香 / 美術：ニシハラ☆ノリオ
※終演後「新開地商店街に現る！山猫団と仲間たちの大行列！」を新開地商店街など新開地周辺地域で開催

22日（金）―**24日**（日）　会場：KAVCホール
KAVC FLAG COMPANY 2020-2021
努力クラブ『救うか殺すかしてくれ』
作・演出：合田団地

23日（土）　会場：1room
ひらめきのたね vol.5
the rocket gold starさんと2コマまんがを描こう !!
～テーマはLOVE！～
講師：the rocket gold star（イラストレーター）
※9日（土）～24日（日）に展示「rocket world展 Vol.2」をKAVCギャラリーにて開催

30日（土）―**2月5日**（金）
KAVCシネマ特別上映
『the believers　ビリーバーズ』

2 FEBRUARY

4日（木）―**7日**（日）　会場：KAVCホール
KAVC FLAG COMPANY 2020-2021
安住の地『¡play!』
作・演出：岡本昌也・私道かぴ

20日（土）―**3月14日**（日）　会場：KAVCギャラリー、KAVCシアターほか
ART LEAP 2020
「特別的にできない、ファンタジー」
出展作家：蓮沼昌宏（美術家、記録写真家）

26日（金）―**28日**（日）　会場：KAVCホール
KAVC FLAG COMPANY 2020-2021
オパンポン創造社
『オパンポン★ナイト～ほほえむうれひ～』
作・演出：野村有志

3 MARCH

12日（金）―**14日**（日）　会場：KAVCホール
KAVC FLAG COMPANY 2020-2021
劇団不労社『BLOW & JOB』
作・演出：西田悠哉

18日（木）―**31日**（水）　会場：KAVCシアター
KAVC シネマ
『Away』
和田淳特集上映『私の秘かな動く愉しみ』
『アルプススタンドのはしの方』
『タイムリミット 見知らぬ影』
『エキストロ』
ナショナル・シアター・ライブ
『シラノ・ド・ベルジュラック』『ハンサード』

26日（金）―**28日**（日）　会場：KAVCホール
KAVC FLAG COMPANY 2020-2021
うんなま『ANCHOR』
作・演出：繁澤邦明

KAVC REVIEW　これ見た？

今回、取り上げる催しは、
ART
若手芸術家支援企画2020
『ピンボケの影像』

開催会期
2020年11月5日（木）～19日（木）

こんな企画でした→シルクスクリーンプリントの技法を扱う、若手の美術作家・大八木夏生と勝木有香による展覧会。本展で大八木は、新開地で撮影した写真をモチーフに作品を発表。勝木は自身初の試みとして、KAVC1階の窓ガラスを支持体とした作品を制作し、発表しました。

今号のレビュアー
福元崇志さん［国立国際美術館　主任研究員］

いわく言いがたいものを捉え、そこに形を与えるにはどうすればよいか。思い切って単純化すれば、たしかにすっきりわかりやすくなるのかもしれないが、しかしそれでは、大切なニュアンスまで失われてしまうだろう。「わからないものは、わからない」と割り切り、対象と向き合う。ただし決して深刻にならないよう、あくまで戯れるように。「ピンボケの影像」と銘打たれた展覧会から浮かび上がってくるのは、こうした軽やかな節度であったように思う。道ばたの名もなき光景を絵に描く大八木夏生と、ものの動きそれ自体を捉えんとする勝木有香。この二人の出品作家はただ、版画という技法を共有しているだけではない。

大八木はまず、訝しがることからはじめる。日々の生活でふと気になった「何だこれ?」を可視化することが、その主たる仕事であると言えよう。撮った写真を参照して、画面を区切る。そして区切られた個々の面にアクリル絵具を塗ったり、シルクスクリーンを刷ったり、カッティングシートを貼ったりする。一瞥しただけでは、何が、どこに、どうあるのか位置関係が掴みがたいし、そもそもどこが塗られ、どこが貼られ、どこが刷られているのかさえもよくわからない。大八木がかつて覚えた違和感は、このように、画面の構造それ自体として提示されている。

一方の勝木が注目するのは、ものが生きて（いるかのように）動くという、これまた日常的な現象である。よく知られたアニメーションから、ストーリーと、キャラクター固有の輪郭を省いてできた、断片的な線の集合。再生と一時停止をくりかえし、コマごとの気になる線を抽出した結果、動きはリズムへと変換され、提示される。もちろん輪郭線をぼかし、ぶれさせ、曖昧にしても動きは表現できるはずだが、それでは視覚的印象を追ったことにしかならない。動きという、それ自体としては目に見えないものを可視化することこそが、勝木の狙いである。

今回の展覧会では、二人が用いる素材もまた目を引くだろう。大八木は画面のところどころに鏡面状のシートを貼り、向こう側の様子を映り込ませていたし、一方の勝木は、薄い布や窓ガラスといった支持体に両面から線を引くことで、表裏のイメージを混在させていた。大八木の面と、勝木の線。ただでさえ把握しがたい両者の画面は、こうして一層の複雑化を実現する。ピンボケの影像とは、画面からなかなか（ほとんど？）浮かび上がってこない作者の主観、あるいは彼女らが共有する醒めたまなざしそれ自体を指していると言えそうだ。

photo：松見拓也

KAVCスタッフと、
ときどき保安のおっちゃん物語とは……

本館の隠れた主人公・保安のおっちゃん3人衆のかたわらで、日々業務に励むKAVCスタッフ。彼らが見つめる新開地とKAVCの日常から、さまざまなエピソードを紹介していきます。

作・画　鈴木裕之（すずき ひろゆき）さん

本誌を機会に新開地デビューを果たした大阪出身・在住のイラストレーター。雑誌やCDジャケット、広告ほか、2020年からオンライン似顔絵屋「LUX」（lux-lux.jp）などで活動中！

KAVCのいま

10月の特集上映「杉村春子という女優」「ニッポンの喜劇映画セレクション」が無事に終了し、ほっと一息ついている映写担当の河合です。ご来場いただいたみなさま、ありがとうございました。今回の特集上映では計10本の作品をフィルムで上映しました。KAVCでは、デジタル上映が主流になった現在でも、16mmと35mmの映写機が現役で稼働しています。フィルム上映とは、静止画が焼き付けられたフィルムを、順に投影することで静止画を動いて見せる、いわばパラパラマンガのような仕組みです。フィルムは「もの」なので、上映回数を重ねるごとに、汚れたり傷が入ったり、保存状態が悪ければ劣化していきます。それがフィルムの弱点ですが、逆にクリアすぎない画やサウンドに混じるノイズがフィルムの味にもなります。一方、映写をする私にとっては、手でフィルムと映写機を触るので、映画を上映するという実感が強く伴います。IMAXや4DX、お家でサブスクなど、映画作品を便利にキレイに楽しむ選択肢がたくさんある今だからこそ、フィルムで観ることも、面白い選択肢のひとつになるのではないかと思っています。

執筆者
河合なお［アシスタント／映写担当］
冬は寒いので嫌いです。でも新しいコートを早く着たい……でも寒いの嫌い……。不毛な思考がループします、冬。

おことわり

新型コロナウィルスの感染拡大に伴う対応について

新型コロナウィルス感染拡大の今後の動向によって、臨時休館の他、自主事業の中止もしくは延期が想定されます。最新状況につきましては決定次第、HPや各種SNS等でご案内いたします。
最新情報の掲載ページはこちらから

STAFF's VOICE

KAVCスタッフが日々活動するなかで、興味を持ったものごとをざっくばらんに紹介していきます。
オススメイベントの詳しい情報などはWebサイトにて！

VOICE 01

9月よりアシスタントとして勤務しはじめました。よろしくお願いします。主に演劇・ダンス事業に関わっています。今年は新型コロナウィルスの影響で、多くの舞台が中止や延期となっていますが、KAVCでは昨年度に引き続き、今年度も11月からKAVC FLAG COMPANYがはじまりました。2020年度も後半戦！！　以前のように、たくさんの方々にKAVCで作品をご覧いただけるように頑張ります。どうぞよろしくお願いします！

2020年11月Ahwooo『パンと日本酒』公演アフタートークの様子

山本和馬
［アシスタント］

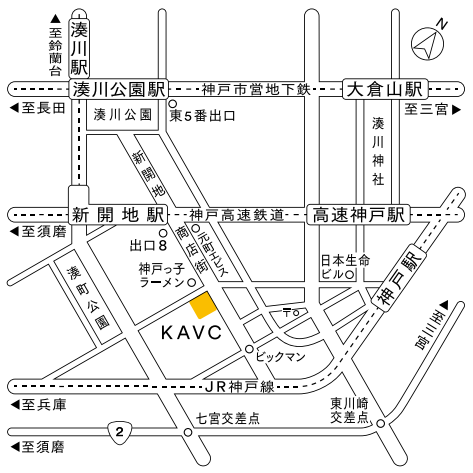
岡村有利子
［美術担当］

VOICE 02

公募プログラム「ART LEAP」は今年で3回目！2020年度の出展作家は美術家で記録写真家の蓮沼昌宏さんです。今回の展覧会は、新型コロナウィルスの影響によって、これまでの日常が「特別的に、できない」状況が続くなか、神戸での滞在を通して蓮沼さんが感じたさまざまな「さびしさ」をテーマに展開します。現在（2020年11月時点）、リサーチ活動の真っ最中！　お楽しみに〜！

神戸アートビレッジセンター

www.kavc.or.jp
指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団
〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14
TEL＝078-512-5500　FAX＝078-512-5356
開館時間＝10:00-22:00　休館日＝毎週火曜日
（火曜が祝日の場合は翌日）・年末年始



アクセス
- 神戸高速「新開地駅」8番出口より徒歩約5分
- JR「神戸駅」ピエラ神戸口より徒歩約10分
- 神戸市営地下鉄「湊川公園駅」東改札口より徒歩約15分

ART VILLAGE VOICE vol.95　**発行日**：2020年12月28日　**発行元**：神戸アートビレッジセンター（指定管理者：公益財団法人 神戸市民文化振興財団）［大谷燠（館長）、柳谷茂昭（館長代理）、林正樹（総務チーフ）、山本聡之（総務・経理担当）、明田春来・橋本実弥（総務・施設運営担当）、近藤のぞみ（事業マネージャー）、前田詩穂（演劇・ダンス担当）、岡村有利子（美術担当）、岡本百子（映像担当）、羽仁真理子（地域事業担当）、野澤美希（広報担当）、河合なお・平川光江・中川恵理子・山本和馬・横山春乃（アシスタント）］　**編集ディレクション＆編集**：多田智美・永江大（MUESUM）　**編集**：妹尾実津季・鈴木瑠理子（MUESUM）　**アートディレクション＆デザイン**：仲村健太郎・小林加代子　**イラスト（内面）**：まちこ！、黒木雅巳　**題字（内面）**：廣田碧（看太郎）、三重野龍　**漫画**：鈴木裕之